



京都大学 総合人間学部 広報

特集 総人・人環 学生研究プロジェクト 2013 「みる」

総人・人環 学生研究プロジェクト 2013 年度募集要項	3
研究課題 1 現代日本の見るお化け屋敷—研究概要（申請書より）.....	4
「お化け屋敷」から「化物屋敷」へ	中元 洸太..... 8
研究課題 2 「形に現れるもの」をみる—研究概要（申請書より）.....	10
感想に代えて.....	須田 智晴..... 12
研究課題 3 総合的に学問して“みる” ～ B'z という対象を使って多角的に“観る”～ —研究概要（申請書より）.....	14
To overcome contradiction ～総合人間・環境学～.....	新井 翔太..... 16
得体の知れないもの。 —総括に代えて—	阪上 雅昭..... 18

退職された先生より

最終講義「線形代数外論」の舞台裏.....	高崎 金久..... 20
-----------------------	---------------

新任の先生方より

着任にあたって.....	倉石 一郎..... 22
京都で古典を学ぶ幸せ.....	長谷川千尋..... 23

特集 総人・人環 学生研究プロジェクト 2013 「みる」

今号では、昨年度から学際教育研究部 / 総人・人環活性化委員会によって新たに始まった「総人・人環学生研究 PROJECT」を取り上げました。

これは、テーマ（2013年度は「みる」）に関わる学生研究プロジェクトを募集して、採用されたものには、研究費として10万円が助成されるという制度です。代表者は、2回生以上の学部学生であること、研究期間は10月～3月の半年間であることが条件となります。また、研究成果の学術的意義は問われませんが、発表形式での報告が求められます。

一次審査、二次審査を経て採択された3件の研究プロジェクトについては研究費が助成され、その研究成果は、2014年4月24日（木）の報告会にて発表されました。

それぞれの研究プロジェクトについて、各プロジェクトのリーダーに申請書から活動の概要を示していただき、活動を終えての感想を寄稿していただきました。また、総人・人環活性化委員会委員長の阪上雅昭先生に、総括としてご寄稿いただきました。

総人・人環 学生研究プロジェクト 2013 年度募集要項

総人・人環学生研究プロジェクト募集

総合人間学部、人間・環境学研究科では、大学院生のアドバイザーのもと、2回生以上の学部生が代表者となり、提案するテーマについての意欲ある学生研究プロジェクトを助成します。日々の講義を受講するなかで身につけた視点や、研究の方法を使って、独創的な研究を行うことを期待します。新しい視点の創出や、研究方法の開発も含めて、自由に考え、自己批評を繰り返して結論を導いてください。研究結果の学術的意義は問いませんが、自分たちの研究成果を研究発表形式で報告してもらいます。

平成 25 年度研究テーマ：「みる」

見る、覧る、看る、顧みる、試みる、John Stuart Mill、コーヒーミルなど自由。

助成金額：1件あたり10万円。最大3件まで助成

物品費・消耗品費・旅費・講師招聘旅費・研究会会場利用料・人件費（謝金）等、ただし、懇親会費・飲食費は支出できない。

研究期間：平成25年10月1日～平成26年3月31日

（研究成果報告会を平成26年4月中旬に行う）

研究代表者の応募資格：総合人間学部2回生以上

総合人間学部2回生以上を代表者とする3名以上10名以下の研究チームを組織すること。チーム構成員の学年・所属学部は問わないが、必ず1名以上人間・環境学研究科所属の大学院生をアドバイザーとすること。大学院生を自力で見つけられない場合は、下記アドレスへ相談のこと。複数の研究チームに属して応募することは不可。

応募方法：研究チームの組織表、当該テーマに対する研究目的と意義、研究計画について

別紙の様式にまとめて、下記アドレスに、PDFファイルもしくはWordファイルで提出のこと。

この企画についての問い合わせも同じアドレスにしてください。

E-mail: sojinkan.project@gmail.com

申請書様式は下記からダウンロードしてください

URL:<http://ganesha.phys.h.kyoto-u.ac.jp/project.html>

応募〆切：平成25年8月31日

選考方法：書類審査により、一次選考を9月7日までに進行。その後、二次選考として公開プレゼンテーションを行う。公開プレゼンテーションは9月下旬に行い、投票の結果で得票の多かった上位最大3件を採択とする。投開票はその場で行い、結果を公表する。

特集 総人・人環 学生研究プロジェクト 2013「みる」

研究課題 1

現代日本の見るお化け屋敷—研究概要（申請書より）

代表者氏名：中元洸太（人間科学系 2 回生）

研究課題名：現代日本の見るお化け屋敷

研究期間：平成 25 年 10 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

研究組織：

- ・ 中元洸太（人間科学系 2 回生）
- ・ 吉川将平（人間科学系 2 回生）
- ・ 山森実希（認知情報学系 2 回生）
- ・ 高取諒輔（国際文明学系 2 回生）
- ・ 寺山 慧（人間環境学研究科共生人間学専攻 D1）

※学年は申請当時のもの

研究目的

1) なぜこの研究を思いついたのか、研究のめざす目的

私たちはしばしば、「お化け屋敷を楽しむ」という言葉を使う。もう少しいくと、「恐怖を楽しむ」と言う時もあるかもしれない。しかし、これはよくよく考えると多少奇妙な言い回しにも聞こえる。恐怖はそもそも娯楽として楽しむものではなく、不快の感情をもよおし私たちが危険の察知や回避に向かわせるものと、日常の経験では考えられているはずだからである。

日本では、古来より妖怪は姿あるものではなく自然現象として現れ、私たちが恐怖させるものであったとされる。しかし、このような妖怪観の一方で日本には化物屋敷を描く物語の伝統が続き、当時から「お化けと、それに耐え抜く勇敢な人物」という構図が存在していた。このような「不快としての恐怖」と「肝試しの精神」の両面を持っていた恐怖は近代合理主義の中で徐々に娯楽化の傾向を見せ、お化けの再現（妖怪手品）からお化け屋敷の誕生（江戸時代の「胴試し絵」は日本初の「お化け屋敷の絵」とされ

る）・お化けのキャラクター化（水木しげるなど）へと結び付いていく（以上、兵庫県立歴史博物館「博物館はおばけやしき」より）。このようにして江戸時代には今のお化け屋敷の原型が生まれ、それは現代にまで受け継がれているという訳である。

江戸期に生まれた近代合理主義とも言えるような考え方が現代にも受け継がれており、それが私たちの「娯楽化された恐怖」への眼差しに影響を与えていることは確かであると思われる。しかしここで着目したいのは、江戸期と現代では娯楽化の中で、恐怖の装置自体に大きな変化が存在することである。元々見世物としての要素が強かったお化け屋敷は、現代においてはお化けがただ外部から眺められるだけではなく、参加者がその世界観に入りこんでいく劇場性を帯びている。そしてこのような過程で、移動式で簡便な仕組みによってつくられるお化け屋敷は徐々に巨大化・複雑化し、遊園地のアトラクションなどとして固定化していく。更に注目すべきは、こうした事態の一方で現代ではこうした恐怖の装置は巨大装置を抜けだし「ホラーゲーム」というバーチャルな空間で、単に映像を見たり小説を読んだりするだけではない疑似体験的な恐怖の装置と化しているということだろう。

この時、「お化け屋敷の変容の中で私たちの恐怖はどのように変化したのか」というのが、本研究における根本的な疑問である。ただし、この問は必ずしも「お化け屋敷が私達の恐怖にどのような影響を与えたか」という一面的なものに留まらず、同時に「お化け屋敷はどのような恐怖の原因を以て私たちが恐怖させるようになったか」という問題も巻き込むことに

なる。このような関係を考えるにあたり、さしあたり次のような図式が考えられるだろう。

まず、私たちの恐怖には、何らかの原因や背景が存在することが想定される（日本人の霊魂観、脳科学による説明など）。そして、運営者は必ずそのような原因や背景に即した形でお化け屋敷と言う装置を組み上げていく（驚かせ型の工夫など）。何故ならば、古今で程度の差こそあれ、お化け屋敷は人々を恐怖させることをその主な目的としているからである。このような過程に応じ、さらに文化的な背景などもあいまって、お化け屋敷と言う装置そのものが変容していきと考えられる（先の見世物から劇場型への変化など）。このような複雑な過程を経て、お化け屋敷は実際に消費者を恐怖させ、それがここで実際に現れてくる恐怖ということになる。

お化け屋敷はどのように変化したのか。その中で私たちが「恐怖」と呼んでいるものは変わったのか、変わったとすればどう変わったと考えられるのか。上記の二点を念頭に、脳機能における情動としての恐怖という狭い枠組みに限らず私たちが「恐怖」と呼ぶものの全体を見据えてこの問題に取り組んでいくことを、本研究の目的とする。

2) アピールしたい点

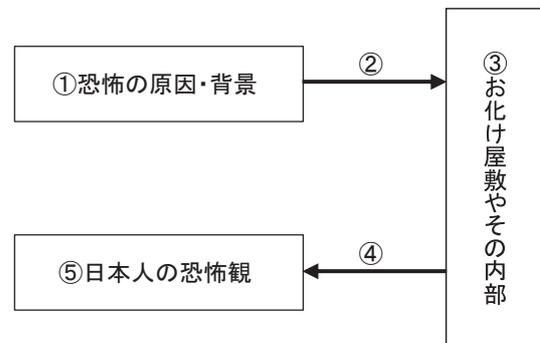
恐怖することそのものは人間のもつ性質かもしれないが、その為につくられた装置は寧ろ文化的なものであると考えていいだろう。そのような目線で考えた時、恐怖について語ることは心理学や精神医学の専売特許ではないし、もしくは文学論や文化史のような一部に限定される必要もない。私たちが日常世界にこうした恐怖の装置を受け入れている以上、その装置を通じた恐怖の検討というものをもっと広く行われていいと考え本研究を企画した。今回は恐怖とお化け屋敷の双方向的な関係を軸に実際の体験やインタビューなども交えながら考察することで、上の目的に迫ってみたい。

更に、今回は後述するように巨大な現代型お化け屋敷に加え、バーチャルな空間におけるホラーゲームを対象としている。昨今では企業によって制作されるようなホラーゲームの他にもフリーゲームと呼ばれる匿名の作者によって自作・無料配布されるゲームも人気であり、更に動画サイトで「実況動画」という形で流通していることも手伝い、私たちの恐怖への眼差しにおいて大きな影響力を有していると考えられる。時間の制約もあり、どれ程の検討が出来るかは分からないが、こうしたバーチャルな恐怖の仮想体験についても検討を加えることで、より包括的な恐怖に対する調査が可能なのではないかと考えている。

研究の具体的な進め方

1. 文献調査

「研究目的」に示した構図に基づき、下の図式①～④について文献による調査を行う。対象については、古典や明治時代の文章なども幅広く含め、書籍・史料・論文にあたることとする



- ①日本人の霊魂観や妖怪観、妖怪の現れる場所、脳科学による恐怖や「怪奇現象」の説明 など
- ②お化け屋敷や妖怪手品（江戸）における応用や実現
- ③お化け屋敷の変容、現代に至る興業の変遷、今のあり方
- ④お化け屋敷に対する反応、それに対する運営側の反応

2. 現地調査の準備

以下の点について、現地調査の準備を行う。

- a. 調査地の選定、日程などの決定、その他準備：
 - 次の候補地を基に、実際の調査地を選定し準備を進める。
 - ・富士急ハイランド最恐戦慄迷宮：世界最大規模のお化け屋敷、様々なギミック、ゲームや映画などとの接続
 - ・東京ディズニーランドホーンテッドマンション：大規模なライド式お化け屋敷、ペッパーゴーストなど視覚トリック
 - ・台場怪奇学校：お台場にある比較的小さな固定式お化け屋敷、気配による恐怖の演出、物語の重視
 - ・その他、地域の仮設型お化け屋敷
 - ・各種ホラーゲーム：「研究目的」に示した通り、本研究では疑似的なお化け屋敷とも言えるホラーゲームも扱いたい
- b. 調査内容・考察方法の洗練
 - ・調査の前に、これまでの文献調査の結果なども踏まえつつ調査内容・考察方法について取りまとめる。
 - ・その際、フィールドワークの方法や注意などについても学びたい。

3. 現地調査

選定された候補地に赴き、以下の方針で調査を行う。予定する主な調査内容は以下の通り。

- a. 実地体験：事前の情報を基に、実際にお化け屋敷に入りどのような演出・仕掛けが施されているかを体験する。
- b. インタビュー：運営者側への口頭（または文面）によるインタビュー。
 - ・図式中②～④について、そのお化け屋敷に即したインタビューを行う。
 - ・「恐がらせるためにどのような工夫をしているか」「それに伴いどのようにお化け屋敷を進化させてき

たか」「お化け屋敷の変容の中で顧客の反応はどう変化したか」、その他理念や経営上の困難など。

- c. レビューの閲覧：お化け屋敷の中には、そのレビューを書き残す人も多い。そのレビューを閲覧する。
 - ・図式中④について、次の点に着目してレビューを閲覧・記録する。
 - ・「そもそもお化け屋敷は怖かったのか」「どのような点を評価しているか」「恐怖する上で著しい不快はあったか」「特にリタイア者は何故リタイアするに至ったか」その他重視した点など。

4. 考察と結論

口頭の研究発表用としてまとめる他、ゼミのまとめとして小論文を作成する。

考察に当たっては、現時点で次の二つのことを考えている。ただし具体的な考察方法としてはまだまだ不十分な点があり、研究の中でより具体的な判断基準などを示すことが必要であると考えている。

- ・データの分析においては、②～④の各項目において幾つかの判断基準（例えば③について「物語を重視するのかもしれないのか」、④について「演出に対する深刻な苦情が多いか少ないか」など）をつくり、それを基にそれぞれのお化け屋敷のデータを分類する。似たデータ同士を集めることで各お化け屋敷における特徴を捉え、同時代・古い時代と比較する。
- ・全体の考察においては、入力（②）、装置（③）に対する出力（④）の関係を比較することで、古今もしくは現代における複数のお化け屋敷における恐怖像の共通点や差異を見出す。これを通じて、最終的には⑤の「私たちに現れてくる恐怖」そのものの変容について結論を出したい。

* 経費について

経費は旅費として使用する。ここでは3-a, bに即した

旅費の概算を示す。

(高速バスはその時々で値段が変わるので、ここでは一応 5,000 円としておく)

- ・ 京都 / 大阪～富士急ハイランド高速バス交通費 : 5,000 円 / 人
- ・ 富士急ハイランド～東京ディズニーランド鉄道交通費 : 3,000 円 / 人
- ・ 千葉～京都 / 大阪高速バス交通費 : 5,000 円 / 人
- ・ 宿泊費 : なるべく安い宿を検討
- ・ 遊園地入場料など

これらの経費を人数分用意する時点で 10 万円は全て使われると考えられる。残りの経費はゼミ生で賄う。

特集 総人・人環 学生研究プロジェクト2013「みる」

研究課題1 現代日本の見るお化け屋敷—プロジェクトを終えて

「お化け屋敷」から「化物屋敷」へ

中元 洸太 (総合人間学部人間科学系3年生)



西宮えびすの祭りに、一軒の仮設のお化け屋敷があった。「さァ、こっちこっち、楽しいお化けさんが待っています。」独特の口上を聞きながら、まだ幼かった筆者はその日

恐らく初めてお化け屋敷に入った。お化け役の驚かしも怖かったが、暗い中でポーっと浮かび上がるお化けの人形が大層怖く、仕舞には道が分からず泣きそうな声で、「出口何処ですか」とお化けに聞く始末だった。

以来十四五年の間お化け屋敷と距離を置いていた筆者が、そんなお化け屋敷をテーマに多少の研究をすることとなったのである。はじめは本プロジェクトの反省を書き連ねようかとも思ったのだが、読者としては筆者がお化け屋敷を取り上げた背景や補足の方が気になるに違いない。そこで本稿では、この点について幾らか書かせて頂きたいと思う。

まず本プロジェクトの背景としては、現在の日本におけるお化けの二面性が挙げられる。暫く前まで流行していたはずの学校の怪談や都市伝説がなりをひそめる一方で、お化けは急速に人間によってキャラクタライズされ日常に溢れかえっている。畏怖の対象となり忌避されるお化け。そして人々に愛好されグッズ化・観光資源化するお化け。筆者には、その狭間に「お化け屋敷」という娯楽施設が見えたのである。この二分法が妥当か

どうかは疑問の余地があるが、少なくとも研究開始の当時はそう思われた。

普通の人々は生きていく中で、こうしたお化け屋敷とどのように付き合っているのだろう。そこから最後にはフィクションであるお化けと日本人の関わりが見えてくるのではないか。更にそこに「何故お化け屋敷は怖いにも関わらず楽しいのか」という一つの問題を盛り込んでいくことによって、複数の視座からこうした事態にアプローチすることができるのではないか。こうした思惑もまた、本研究の一つの重要な契機であった。

さて、お化け屋敷を取り扱うことについて幾つかの疑問や疑念があるかもしれない。次にここでは二つの問に対し一応の回答を与えておこう。はじめに、例えば次のように考えることもできるだろう。「お化け屋敷は一部の遊園地向け遊戯施設の製造・販売業者・プロデューサーによって造られるもので、彼らが新しいものを造ることで、人々はそれを受容し新たな欲望を刺激される。だから、そうした一部の人々の営みを日本人の営みに敷衍するのは間違っている。」こうした考え方は、いわばお化け屋敷を特殊な文化と位置づける処から来ている。

しかし、こうした考え方は、広くお化け屋敷を見たときには些か狭量であるように思われる。例えば戦前戦後の遊園地においてお化け屋敷は民衆の心を捕えたからこそ必須の娯楽施設となったのであり、そもそもこの手の施設は常に民衆の需要、ひいては社会的背景を加味しなくてはならない。お化け

屋敷が人々や社会に影響を与えるのと同じように、社会や人々もお化け屋敷に影響を与えるのである。

また、「一部の人々の営み」は「全員の営み」ではないにせよ一つの生活事実であることに変わりないし、そもそもこの手の考え方はお化け屋敷を「商業的なお化け屋敷」に限定する処から生まれる。本研究プロジェクトではなかなか立ち入れなかったが、昨今では学生団体やNPO法人がお化け屋敷のイベントに関わるケースがあるし、そもそもお化け屋敷は学園祭・文化祭の定番でもあったはずだ。そう考えると、お化け屋敷を造ったことがある人もまた、私たちが考えるよりも案外たくさんいるのではないだろうか。お化け屋敷は、お客として入るにせよ造り手に回るにせよ、私たちの身近にあるのである。

第二に、「フィクションとノンフィクションの狭間が見たければ、ホラー小説やホラー映画でいいではないか。それなのに何故わざわざお化け屋敷というややこしい対象を選ぶのか。」という疑問もある。確かにこうした作品にも私たちの「怖いもの見たさ」の感覚は働くし、あちこちのお化け屋敷を巡るより遥かに安価、更に民衆の間にも広く受け入れられているし、様々な形でプロアマ問わず広く創作されているようにも思われる。今でも夏といえばお化け屋敷と並んでホラー映画や心霊特集は定番となっているではないか。

ただし、お化け屋敷とこうした小説・映画とは根本的に異なる部分がある。それは、お化け屋敷が肝試し同様にお客がその中で振る舞う物理的な空間を用意していることである。確かに私たちは小説や映画を見ることで恐怖を感じるかもしれない。しかし私たちの感じる恐怖はそれだけに終始せず、日常の中で想起され反復される。鏡に映る幽霊をテレビで見た人が、その晩の風呂上りに鏡を直視できないというように。そして、このような想起・反復はお化け屋敷の中でも繰り広げられて

いるのではなかろうか。お化け屋敷を取り上げたのは、このような働きに対しても一定のアプローチを仕掛ける余地を残したかったためである。

以上、些か大仰にはあるが本プロジェクトの野望と疑問への応答を今更ながら告白してみた。ところが実際に調査を始めると、お化け屋敷にまつわる研究や資料は数少なかつた。それ故に数少ない資料を集め最近のデータを組み合わせることでお化け屋敷の現代史を試みることに、それが最初の課題となったのだ。そして結局、本プロジェクトはその途上で終わってしまった感が否めない。これでは上に挙げた様々な疑問・目的に応えるべくもないが、それでも本研究でお会いした方々から大変面白い話を聞いたことが（まだ還元不能ではあるものの）一つの収穫であったことも、また確かだ。今後も細々とではあるが調査を続け、これを還元可能な形にできればと思っている。

お化け屋敷、それは私たちの心という「化物屋敷」への入り口でもある。フィクションであることが、はなから明示され、設計図さえあれば全ての仕掛けが明らかになるブラックボックス。そんなお化け屋敷の調査を通して、未だ不可解で謎に満ちた私たちの心意へ至ること。その過程を少しでも描くことが今後の課題となり続けることだろう。研究プロジェクトは終わったが、研究自体は本当に細々とではあるが続けようと思っている。今年の夏も、全国津々浦々多くのお化け屋敷が人々を呼び込んでいる。最近印象的だったのは、あるお化け屋敷を手伝っていた際のこと。入り口で泣きじゃくる女の子が、「妖怪ウォッチ」という作品に登場する猫の地縛霊「ジバニャン」のぬいぐるみをぎゅっと抱きしめていたことだった。連日暑い日が続く中、何故人々はお化け屋敷に並ぶのだろう。今日もそんなことを思いつつ、何処かのお化け屋敷に筆者は並んでいるかもしれない。

(なかもと こうた)

特集 総人・人環 学生研究プロジェクト 2013「みる」
研究課題 2

「形に現れるもの」をみる—研究概要（申請書より）

代表者氏名：須田智晴（認知情報学系 3 回生）

研究課題名：「形に現れるもの」をみる

研究期間：平成 25 年 10 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

研究組織：

- ・ 須田智晴（認知情報学系 3 回生）
- ・ 窪田敦之（認知情報学系 3 回生）
- ・ 田所大輔（人間環境学研究科 M1）
- ・ 伊藤 存（美術家、京都市立芸術大学非常勤講師）
- ・ 木村英輝（美術家、KI-YAN）
- ・ 谷口一也（建築家、Livart 代表）

※学年は申請当時のもの

研究目的

1) なぜこの研究を思いついたのか、研究のめざす目的

「数学の目標は真の中における調和であり、芸術の目標は美の中における調和である。（中略）だから両者はふつつ考えられている以上によく似ている。」¹⁾

この岡潔のことに見られる数学と美術の類似性は、一般によく言われる数学の美術性とは大きく異なっている。ここでは、数学的概念や幾何学的図形には美が感じられるといったことではなく、営為それ自体の類似性が語られているのである。そして、目標においてだけでなく、創造あるいは発見の過程においても、やはり類似性がみられるという。それは、“… a famous poet is less of an inventor than a discoverer …”²⁾ という一文に要約される。すなわち、概念や証明、作品を新たに創りだすのだが、それは恣意的に行われるのではなく、当人にとっては、最初からそこにあるものを発見することにほかならないのである。

また、芸術家の伊藤存氏は、岡潔が著書の中で語っている発見の過程は、そのまま芸術にも当てはまり、あれほどよく気持ちを言いあらわしたものはないと言う。

本研究では、こういった数学と美術の類似性を手がかりに、人間の知的営為、創造行為に対する一つの一般的でない見方を提案することを試みる。すなわち、これらの一見かなりかけ離れた行為が、実は当事者の視点から見るとほとんど同一の性質を有するものであり、したがって、それらを包摂する何かが存在すると考えられ、両者はそのもとで統一して考えられるべきものであることを示したい。それは、数学と美術だけではなく、おおよそ創造性の関わるもの全てに共通するものであろう。方法としては、発想や手法、作品あるいは成果に対する「美的」判断基準といった点の比較を通して、これら二つの領野では、何が似ていて何が違うのか、また発見あるいは発明の際、何が起きているのかといった点を問う。その問いは、鑑賞すること、すなわち作品や証明を「みて」理解することと、発見・創造すること、すなわちいわゆるプラトンの実在を「みる」ことをめぐって発せられるが、研究の重点は、「真」や「美」のあり方、受け取られ方という静的・受動的な側面よりも、それがいかにして生み出されるかという動的・能動的な側面に置かれることになる。それゆえに、それぞれの成果物について論じるのではなく、具体的に研究・創作が行われる過程を知ることが必要となる。この過程の理解は、当事者の「証言」のみならず、できる範囲での実践も含めることでより一層実感を帯びたものとなるだろう。

2) アピールしたい点

この研究はその性質上、必然的に「学際」研究となるが、それだけではない。前項で述べた目標に近づくために、第一線で活躍する芸術家の方々を招き、議論を行うことを予定しているが、これはいわゆるアカデミアの外と大学との接点を作るという点で、それ自体意義のある試みになると思われる。すなわち、「学」の外とも共同した研究となるのである。それは基本的な活動内容である、伊藤存氏とともに「岡潔の数学」を学んでいくという点にも当てはまるだろう。のみならず、芸術家の方に高等数学の世界を紹介するということは非常に稀な挑戦であり、新しい視点を芸術と学問の両方に持ち込む可能性がある。

また、今回研究に協力していただく予定の方々は、いずれも京都を代表する芸術家であり、また、その題材も「岡潔の数学」を中心テーマに置くため、京都大学という大学の土地性を反映した研究となることが期待できる。そもそも、この大学の持つ気風は、京都という土地に起因する部分が大きいと考えられる。それは主に「中央」からの距離のためであるが、昨今の様々な面での画一化の流れの中で、改めてこの *genius loci* を確認することは意義があるだろう。

研究の具体的な進め方

基本的には週一回のコロキウムによって進めてゆく。ここでは、「岡潔の数学」をテーマに、層の理論や多変数関数論の理解を目標として、セミナー形式でテキストの輪読を行うとともに、必要に応じて原論文や手稿を参照して、理論が創造される様子を観察する。そして、これを踏まえた上で、美術と数学の両方に共通する思考のあり方や創造の過程を明らかにすることを目指し、参加者同士で議論を行う。ここで、美術における創造や発見についても論じられるだろう。また、数回に一度、各自の専門について発表を行うことで、さらに相互理解を深め、新しい視点の開拓を目指す。そして、1回もしくは2回程度美術館を

見学することで、さらに芸術への理解を深めることも行う。こうした議論・発表の内容は文書の形でまとめておき、最終的には冊子の形で公開することを予定している。また、講師・学生といった区分は採用せず、あくまで共同で研究を行う予定である。

数学のテキストは、加藤五郎『コホモロジーのころ』(岩波書店)、野口潤次郎『多変数解析関数論—学部生へおくる岡の接続定理—』(朝倉書店)などを予定しているが、必要に応じて適宜追加・変更する。予算の内、テキスト代としては計2万円程度を想定する。

毎回、伊藤存氏をお招きする。予算の内、伊藤存氏への謝礼は一回あたり4千円、その15回分で計6万円を想定している。また、特別講師として木村英輝氏を一度お呼びすることも予定しており、この一回分で1万円をまた謝礼として計上する。

その他に、交通費・美術館見学費用として1万円程度を想定している。

- 1) 岡潔『春宵十話』(光文社、2006) p.164
- 2) Jorge Luis Borges, "Labyrinths: Selected Stories & Other Writings" (New Directions Publishing, 1964) p.153

特集 総人・人環 学生研究プロジェクト 2013「みる」
研究課題 2「形に現れるもの」をみる—プロジェクトを終えて

感想に代えて

須田 智晴 (総合人間学部認知情報学系 4 回生)



1, はじめに

この原稿は研究プロジェクトの感想ということになっておりますが、筆者はここでそのようなものを書こうとは思いません。そうではなく、今回の反省点を整理しておく

ほうが、後の人の役に立つでしょう。以下に、こうしておけば良かったと思う事項を整理して述べます。

2, 目標の選定について

研究を始める際には、何を達成したいのかを明らかにする必要がありますが、その目標に無理があると、後々非常に苦しくなります。

失敗を前提とする

このプロジェクトに参加する学生は、卒業研究の経験もまだないのが普通でしょう。失敗しても仕方ありませんし、おおよそ本格的な研究は最初から期待されていません。むしろ、これは研究方法について試行錯誤する機会と捉えるべきです。また、失敗した時に收拾をどうつけるかを始めに決めておくといよいでしょう。

自分や他人の実力を過大評価しない

危なくなったら頑張っって何とかしよう、あるいは他の人に協力してもらおう、というのはうまく行きません。まず、この研究に割ける労力や時間は限られています。土台、リソース不足で突貫工

事も儘なりません。さらに、不慣れな対象を研究することになりがちですから、いくら有能な人材を集めたところで、その実力を発揮できるわけではありません。

目標を絞る

実現可能な目標をただ一つだけ選ぶようにしてください。努力すれば何とかかなりそうな目標を選ぶのではなく、今すぐにでも終わらせられる対象にすべきです。そんなものはつまらないと思うかもしれませんが、さもなければ、失敗の可能性は跳ね上がります。

モチベーションを維持できる対象を選ぶ

学生側から応募して参加する以上、自分の興味対象を研究するものと思います。しかし、企画者以外の参加者もいることに留意してください。その人達はあなたと利害や興味を共有しているとは限りません。にもかかわらず、かなりの長期間に渡り研究を行わなければならないため、途中で嫌になる人が現れることが予想されます。他の参加者にも何か得るところがあるようにすべきです。

資金規模に注意する

研究資金が支給されますが、この 10 万円という金額は、文書中心の研究を行うには多すぎる一方、フィールドワークを中心とするにはやや不足するようです。使い道には十分に注意してください。

3, 研究の進め方について

ただ普通に研究を進めるだけでも、様々な課題

に直面することになります。更に、この研究プロジェクトは共同研究という形を取りますから、この形式特有の問題点にも気をつけなければなりません。

割りきって考える

研究とその他の事項は分けて考えてください。例えば、研究中の議論であなたの意見が否定されたからといって、あなたが否定されたわけではありません。どうか感情的にならないようにしてください。これは研究という名のゲームなのです。

作業内容の見通しを立てる

何か面白いものを発見しようとするなら、事前に作業内容を決めて計画的に研究してもうまくいくとは限りません。しかし、この研究プロジェクトではそこまでは求められていませんから、何をいつまでに行うかを決めておくほうが無難です。後の混乱を防ぐためにも、作業の割り振りやその締め切り日時を詳細に定めておくことは重要です。特にフィールドワークなど何らかのイベントを予定する際には、その準備にかかる時間も考慮する必要があります。また、決定内容は出来るだけ早めに実行すべきです。たとえ半年後の予定であっても、それに向けて直ちにできることはしておきましょう。

意思疎通を徹底する

この項目は共同研究という形式を取る際、特に重要になります。まず、全員が目標を正確に認識していることを確かめてください。たとえ友人と研究を進める場合であっても、情報伝達に問題がないとは限りません。大抵の場合、何かの誤解が生じていますから、必ず訂正しておくべきです。少しの誤解が元で大きな問題が生じることも多々あります。重要な項目に関しては、書面での通知も行うと良いでしょう。また、言いたいことは遠慮せず言うことも重要です。これは前述した「割りきって考える」という点にも関連しますが、日常生活ならともかく、研究の枠内においては主張

したいことをはっきり述べて差し支えないはずですよ。

適宜妥協する

研究内容について妥協することは、できれば避けるべきです。しかし、時間的な制約があるため、方針を徹底することがどうしても難しい状況に陥ることがありえます。その時は、はじめの計画に変更を適宜加えたほうがよいでしょう。また、研究方針に関する議論など、意見が対立する場面もあるかと思います。双方が自分の意見を強硬に主張すると、交渉は破綻し結局共倒れとなりかねませんから、妥協点を探るようにしてください。

先行文献は早めに集めておく

研究の全体的な筋道が見え始めてから先行文献を探すほうが、やりやすいようにも思えます。しかし、何が既に言われているのかを調べることは、研究方針を決める上で役に立ちます。また、後になってから重要な文献が発見されると悲惨です。早めに調査しておきましょう。

必要な事務手続きは早めに確認する

研究活動と直接関係のない、事務的な手続きも行わなければなりません。特に金銭の出納に関するものは複雑なので、十分に注意してください。

4. 結論

以上、長々と反省点を述べましたが、結局次の三点に要約されます。

1. 研究方針は簡単に
2. 意思疎通は確実に
3. 事前準備は迅速に

ここで述べた注意点は、すべて筆者の失敗の裏返しです。どうか過ちを繰り返さないよう、ぜひ参考にしてください。

(すだ ともはる)

特集 総人・人環 学生研究プロジェクト 2013「みる」

研究課題 3

総合的に学問して“みる”～B'z という対象を使って多角的に” 視る ”～ 一研究概要（申請書より）

代表者氏名：新井翔太（人間科学系 4 回生）

研究課題名：総合的に学問して“みる”

～ B'z という対象を使って多角的に” 視る ”～

研究期間：平成 25 年 10 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

研究組織：

- ・新井翔太（人間科学系 4 回生）
- ・溝渕克仁（国際文明学系 2 回生）
- ・柳田真弘（人間環境学研究科 M1）
- ・長澤勇貴（総合人間学部 1 回生）

※学年は申請当時のもの

研究目的

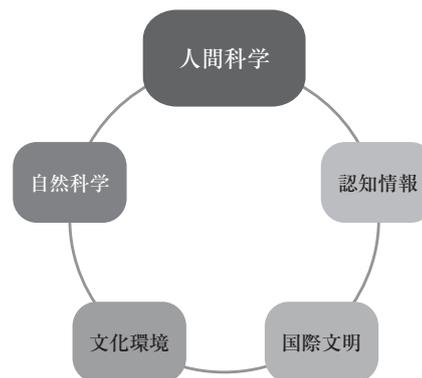
1) なぜこの研究を思いついたのか、研究のめざす目的

総合人間学部に在籍していながら総合人間学と胸を張って言える研究が出来ている学生はどれほどいるだろうか？学生だけではなく、教員も果たして出来ているであろうか？多くの分野はあるものの、結局それぞれの専門分野畑に留まって他の分野にはノータッチで終わり蛸壺化しているのが現状ではないだろうか？

我々は以上のような現状を踏まえ、真の総合人間学を学生の手によって打ち立てることをここに宣言する。総合人間学とは、人間の存在を人間の内面的な心理、価値や思想の面あるいは身体面からだけではなく、人間のおかれた社会、政治、経済、文化、歴史的環境、さらには物質や生物などの自然環境との関係を含めて総合的に理解しようとする学問のことである。つまり単に学際的という名のもとで多分野があ

ればいいのではなく、人間に関する諸分野が有機的に関連し合い、

総合されてこそその総合人間学である。従って総合人間学は人間の営為を総体的に捉える為に視点の変位により様々な諸相を呈するが故に常に創造される研究分野である。このような観点から申請者達の世代が享受するポップカルチャーを取り上げ分析を行う。



2) アピールしたい点

申請者はポップカルチャーの中から B'z を素材として総合人間学を構築する。また実際に学際研究はいかにして可能となるか、どうしていけばうまく運用できていくかといった課題に直面しながら進めていくことになるであろう。若い学生がそれぞれの感性を持ってその課題に対峙し乗り越えていく過程で学際研究の在り方も同時に見えてくるであろう。そのような意味でも学際研究・総合人間学自体の研究とも言える。

テーマは B'z であるが、このテーマは研究の中では注目されておらず、そこに光を当てることでみえるものがあると思う。それは複雑な現代社会を捉え

る上で既存の枠組だけでは立ち行かなくなってしまうからであり、新たな視点で見えていく必要があるからである。B'z は CD 総売り上げが日本で断トツのトップであり 25 年もの間長く太く走り続けているが、これは B'z が人間の本質的な共通了解的な琴線に触れているからであり、また社会に多大なる影響を与えているからではないだろうか。ここに総合人間学として研究する意義を見出すのである。

研究の具体的な進め方

B'z を通して様々な視点から“みる”。総合人間学・学際研究を目指す。なぜ B'z は 25 年もトップを走り続けているのだろうか？その解明のため、B'z とは何か？や B'z から派生して考察される事象について分析を加える。

具体的なやり方としては各々が興味がある分野の視点から同じ B'z というテーマを研究してみる。月に二回集まりゼミのような形式で全員の発表会を行い夫々の視点から意見を出し合いフィードバック、そして取り入れる。この運動を通して研究を進めていく。今上がっている案は以下のとおりである。

- ・ 歌詞解釈と現代思想（他にも現代物理学・宇宙論・カオス理論複雑系）の相関性
- ・ 社会的に B'z を捉える～ B'z と社会・大衆との相関性
- ・ メディア論との絡み
- ・ 脳科学的な分析
- ・ 精神分析～ B'z を聞く側と B'z 自身（歌う時の心理状態）
- ・ B'z と歴史 / 反復～ 25 年以上走り続けるトップランナーの共通点
- ・ B'z と恋愛
- ・ B'z とスポーツ～オリンピックや世界水泳の主題歌、潜在エネルギーの実現

タイムテーブル

- 9 月 個々人が仮テーマ設定。構想を練って議論。文献調査開始。
- 10 月 総合人間学研究の可能性を探る為に、4 回生の卒論中間発表会を開催する。
- 11 月 各々のテーマを深める
- 12 月 個人のテーマ仮発表。フィードバックし合いテーマ再構築。
- 1 月 発表し合う。そしてそれぞれに干渉し合い総合人間学を構成。
- 2 月 みんなの研究を相乗効果させ統合していく。総合人間学研究の可能性を探る為に、4 回生の卒論発表会を開催する。
- 3 月 完成

研究費の使用用途

- ・ 本等の文献調査費（4 万円）
- ・ 考察対象となる作品購入費（3 万円）
- ・ 発表資料費（1 万円）
- ・ イベント諸経費（1 万円）
- ・ 実験費（1 万円）

に使用予定。



特集 総人・人環 学生研究プロジェクト2013「みる」

研究課題2 総合的に学問して“みる”～B'zという対象を使って多角的に“観る”～
—プロジェクトを終えて

To overcome contradiction ～総合人間・環境学～

新井 翔太 (京都大学大学院人間・環境学研究科 修士課程1回生)



はじめに

この度、総人広報に寄稿させて頂ける運びとなり大変嬉しく思っています。総人広報に文章を掲載させていただくのは其実2回目となります。前

回は学部2回生時に総人オープンキャンパス実行委員として書かせて頂きました。オープンキャンパスや合宿等の総人関係の活動を数多く乗り継いで来て、学生自主研究プロジェクトに巡り会うことが出来ました。本稿ではプロジェクトにどのようなスタンスで取り組んできたかを述べたいと思います。

「総合的に学問して“みる”～B'zという対象を使って多角的に“観る”～」

本研究プロジェクトは書類選考→公開プレゼン→研究期間→最終公開プレゼンという流れで半年間取り組みました。そのプロジェクトは「面白い研究」をするというプロジェクトでした。面白い研究とは、対象を一方向からではなく多角的観点から見る総合的な研究だと考えプロジェクトをスタートさせました。B'zという対象を使って多角的に見る総合的研究という内容で書類審査を通過しました。またどうすれば客観的に「面白い」と思ってもらえるかを分析し、他研究に応用ができる可能性の広がりを示すように気をつけたことで

公開審査プレゼンも好評でした。その結果、プロジェクト企画が大学から認められ研究費を獲得しました。

そして研究費を獲得した後、本格的にプロジェクトが動き出しました。しかし実際に始めてみると総合研究の難しさが立ちはだかってきました。多角的に見ようとするそれぞれが異なる分野の研究をしてそれが寄せ集まっているだけになってしまうからです。チームとして動くプロジェクトにも関わらず、各々がバラバラで機能不全になりかけていました。

そこでその状況を打開する為に、改めて根本的にコンセプトから考察し返してみました。「面白い研究」とは何か？それを達成するにはどうプロジェクトを運営していくのが最適なのか？を問い直しました。既存の研究とは全く反対の新しい研究が「面白い研究」といえるのではないかと考えました。一般に既存の研究とは「狭いテーマに絞って厳密にするもの」であるので、それと逆の「多少荒くても広範に多角的にするもの」。そして単に逆にするだけではない、新たに枠組みを創出していく研究こそが面白い研究ではないか、と考えました。ここから、どのような新しい枠組みがあるのか？を追求することがプロジェクトの進むべき真の目標になりました。このように組織での企画運営やプロジェクト内容の骨組みを、コンセプト作りを行うことで迅速に組み立て、チームの進むべき方向性を示していきました。目標が明確化され

たことで、其々の分野研究を並行しつつ新しい枠組みを組み立てる事に成功し、プロジェクトを完遂することができました。その新しいパラダイムというのは、B'zという対象に潜んでいる「核心」に様々な分野を取込ませ、更に「核心」から様々な分野に発散していくようなサイクル化されたモデルで、「総合人間・環境学」と名づけました。この「総合人間・環境学」というコンセプトを最終公開発表会でも前面に押し出しました。新たな枠組みを創るという「面白さ」、そしてこのモデルが他の研究分野でも応用可能であるという「面白さ」が相俟って、最終公開プレゼンも成功させることが出来たのではないかと思います。

そして本PJは興味に則した研究プロジェクトであったと同時に、もう一つの意味がありました。それは、総人・人環にはどういう意義があるのか？そこに属する学生の使命とは何であるのか？といった問いに繋がっていたことです。プロジェクトはその問いの発起人でもあり、答えのヒントとなりうる存在なのではないかと思います。

総合して、このような様々な幸運な機会が与えられたことに迎も感謝しています。

総人・人環活性化委員会

私は総人・人環活性化委員会の発足当時から参画しています。そして今回のプロジェクト企画はこの総人・人環活性化委員会が主催して行われた記念すべき第一回目でした。勸の良い方はあることに気付かれた事でしょう。

実は、私は今回の学生自主研究プロジェクトの参加者側でもあり主催者側でもありました。つまりどういうプロジェクトにしていくかを決めている側でもありました。これはプロジェクト参加側としてはズルイと感じられるかもしれません。しかし、むしろ私は重点を主催側に置いていました。

つまり、自分達の研究プロジェクトであってさ

えも3つのうちの1つとして相対化して捉えていました。それは初年度の今年がこれからのプロジェクトの成否を占う試金石的位置づけにあると強く意識していたからです。

「面白い」研究をテーマにした3つの研究プロジェクトがあるなかで、来年・再来年・未来の視座も取り入れ自らの研究プロジェクトも進めていました。3つの研究間で幅の広さを持たせられるようにするため残り2つの研究間のバランスを考え自らの研究を工夫しました。さらに自らの研究自体がプロジェクトの方向性を照らしていけるような内容にしました。このように実は完全に主催・運営目線で研究をしていました。

相反する立場に身を置きつつ推進することは困難なチャレンジでしたが、総人・人環の活性化の為に繋がるなら！という熱い想いで乗り越えられました。

最後に

私たちの研究プロジェクトの本当の意味での成功はこれから生まれる次の世代のプロジェクトにかかっています。総人・人環の発展を祈りつつ、今後非常に期待しております。

(あらい しょうた)

特集 総人・人環 学生研究プロジェクト 2013「みる」

得体の知れないもの。ー総括に代えてー

阪上 雅昭 (自然科学系)



この特集をご覧になって学生研究プロジェクトについて知られた方も多いただろう。これは、総人・人環の学生・院生のみなさんに自由に研究してもらおうという企画である。成果は問わない。

自由な発想でおもしろいこと（研究）をやりたい。まったく自由だと総人と同じで却って何をやりたいか決められないかもしれないので、ゆるいテーマを設定した。第1回目は「みる」であったが、見るや観るとは限らない。コーヒー・ミルをテーマにすることや、・・・をやって“みる”でもいいのである。

まずはこのプロジェクトが始められた経緯から説明したい。今から2年前、人環・総人の教員は国際高等教育院の設立に対して反対していた。教育院ができることで、京大の教養教育の多様性が大きく損なわれ、さらに人環・総人が解体される危険性もあったからである。反対活動は当初は学生からも支持されていた。しかし時間が経つにつれて、「あなたたちのやっている全共教育もたいしたことではない」、「総人を守ろうと言っているが、その総人でどのような学生を育てるのか全く考えてこなかったではないか」というまっとうな批判も浴びるようになった。学生と意見を交わすたびに、批判されたこと、総人のあり方や教養教育についてこれまで以上に真剣に考えなければならないと痛感したことを鮮明に覚えている。反対活動が一

段落した頃、当時の富田研究科長の発案で将来ビジョン検討小委員会と総人・人環活性化委員会という2つの委員会が設立された。前者は人環・総人の教育・研究組織の将来像を検討するため、後者はすぐに学生に働きかける活動を行うための委員会であった。学生研究プロジェクトが活性化委員会により企画されたことは容易に理解できるだろう。

もちろん学生研究プロジェクトが私たちに浴びせられた批判に直接答えているものでは必ずしもない。むしろ、何か総人生が参加するおもしろそうな企画をやろうということで始まったものである。このように書くと思いつきで始めたように見えてしまうが、そこにはいくつかのねらいはある。あるテーマについて主体的に取り組むこと、グループでも研究を試行錯誤しながら進めていくことにより得られる経験はとても重要である。非常に大きな教育的効果が期待できる。院生がアドバイザーとして加わるので総人と人環をつなぐこともできる。最初にも書いたが、テーマの設定はとてもゆるやかである。こじつけでもいいので遊び心をもって研究のテーマをひねり出してほしい。このプロジェクトに参加して楽しんでもらうことを望んでいる。

一回目である今回の「みる」には3件の応募がありプレゼンテーションによる審査を経てすべて採択された。それぞれのプロジェクトの内容については、本特集のそれぞれの申請書をみてほしい。今年の3月にプロジェクトは終了し、4月には発

表会も行われた。なかなか楽しい発表会であった。ここでは3つの研究課題それぞれに立ち入るよりは、むしろ第一回目を終えたところでのこのプロジェクト全体についての感想を述べたい。採択された研究課題は3件であったが、その内容や特にプロジェクトの進め方を見ていると、企画した私たちが想定していたより、はるかに多様で幅広いものになっていた。研究としてみればうまくいかなかった課題もあるように見受けられるが、そもそも成果を要求していなかったのもそれは問題ではない。グループ内での意見の対立などもあったようだが、そのような体験は貴重である。適切な言葉がなかなか見つからないのであるが、私たち教員が研究と思っているものとはかなりノリの異なる“研究”が行われていたことがとても印象に残っている。

教員としてのキャリアを積むとそれぞれの研究のスタイルが固まってくる。博士論文ほど専門性を問われない卒業研究であっても学生に指導教員として接すれば自分の尺度で評価してしまうだろう。どうしても私たちは“まじめに”研究してしまいがちである。それに比べてプロジェクトで行われていた“研究”はもっと得体の知れないものであった。それを未熟であると切り捨てることは簡単であるが、私はその得体の知れないものに惹かれる気持ちを見捨てることはできない。私たち教員の多くは総人出身ではない。そして総人という学部をいささかもてあまし気味である。例えば“学際”あるいは“総合的”などという言葉は表面的に使うことはあっても、そこには実感は伴っていない。幻想かもしれないが、彼らの“研究”から感じる得体の知れないものの中に総人的なものが潜んでいるかもしれないのである。おそらくプロジェクトをやっていた学生にもそれが何かは見えていないと思う。少し引いた視点に立つことができる私たち教員が彼らの“研究”の中にある総

人的なものを見極めなければならないと感じている。

(さかがみ まさあき)

退職された先生より

最終講義「線形代数外論」の舞台裏

高崎 金久 (近畿大学理工学部教授)



3月末で京大を早期退職して近畿大学理工学部理学科に移籍しました。例年ならば定年退職される先生方が数名おられて、その陰に隠れてこっそり出て行くこともできたはずですが、あいにく

今年は定年退職がなく、教員の退職は私一人で、心ならずも大変目立つことになってしまいました。さらに、諸々の形式を整えるために、いわゆる「最終講義」をしなければならなくなりました。

この最終講義の内容の選択にはずいぶん迷いました。普通の最終講義は思い出を語るものが多いように思いますが、心理的に中途退職の意識がある私は思い出話をする気はなく、むしろ前を向いた話をしてみたいと考えました。もちろん、いろいろな人々の出席が予想される最終講義では、あまり専門的な話はできません(だからこそ、思い出話になりがちなのですが)。自分の研究について語ろうと思っても、私の主要な研究テーマである「可積分系の理論と応用」はきわめて技術的な話題で、数式や専門用語を使わずに説明することが難しい。なかなか小川洋子の小説『博士の愛した数式』のようにはいきません。

そこで、数学そのものは話題としないで、「線形代数外論」というちょっとフザけた題目で、数学史に関する話をすることにしました。私はもともと数学史には大変関心があります。これは学部・大学院時代に指導を受けた小松彦三郎先生の影響です。小松先生は函数解析学や超函数論の研究者

として多くの弟子を送り出し、東京大学を退職して東京理科大学に移籍した後は数学史、特に江戸時代の日本の数学(和算)の研究に転じて、現在も活躍中です。私はその門前の小僧として、学生の頃からゼミや研究会の場などで数学史(おもに欧州の数学史ですが)の話の伺う機会が何度もありました。そのような経緯から、自分でも折に触れて数学史の小ネタを仕入れては、それを自分の本や雑誌記事の中に(しばしば脚注として)書き込んで自己満足に浸っています。そのノリで、最終講義では線形代数の歴史を取り上げたのです。その意味で、私は単なる数学史ファンであり、小松先生と違って研究レベルにまで進む意図も覚悟もまったくありません。

ちなみに、小松先生は文部省の教科課程審議会に入って学習指導要領の改定の審議に加わったこともあり、その経験や19世紀後半の日本と英国の数学教育に関する知識に基づいて「なぜ数学は教育の中心にあるか」という論文(東京理科大学『理学専攻科雑誌』43巻1号、176-203頁、2001年)を書いたり、同じ表題の座談会(岩波書店の雑誌『科学』2002年11月号に掲載)に加わったりしています。この論文の中には、吉田松陰が算術(数学)と地理を重視したことや、松蔭が江戸で師事した佐久間象山の「詳証術(数学)は萬学の基礎なり」という言葉も登場します。松蔭の話は大変印象的だったので、3月に総合人間学部の先生方の前で退職の挨拶をした際に、ネタとして使わせていただきました。象山・松蔭と幕末から明治初期にかけての日本の数学教育がどのようにつながるか、という点に興味をもつ読者はぜひこの論文

(国立情報学研究所のCiNii データベースから pdf ファイルとしても入手できます)をご覧ください。

ところで、なぜ「線形代数」であり「外論」なのか。線形代数を選んだのは、第一に、私が京大に在籍して担当した(平行して、10年以上にわたって京都工芸繊維大学で非常勤講師としても教えた)講義の中で、担当回数が圧倒的に多いのは、間違いなく線形代数の講義だからです。その意味で、最後を線形代数で締めるのは悪くない考え方でしょう。第二に、私の研究でも、線形代数はきわめて重要な役割を果たしています。大学の数学教育は微積分学と線形代数に始まって先へ進むので、線形代数は初歩的な数学と思われがちですが、大学初年で学ぶのは線形代数のほんの入り口で、線形代数の奥はまことに深いのです。実際、私は日本評論社の雑誌『数学セミナー』で15回にわたって「線形代数と数え上げ」という記事を連載しましたが(2012年に単行本化)、その目的は線形代数(特に行列式)が数学・数理物理学のある種の数え上げ問題に対して強力な道具となっていることの解説でした。このような意味で、私は線形代数に格別の愛着があります。

「外論」という言葉は、前述の退職挨拶の際に、最終講義の予定も紹介していただいた富田恭彦先生から「カムイ外伝のようだ」と評された通り、白土三平の漫画『カムイ外伝』を意識しています。さすがに「線形代数外伝」ではあまりに挑発的なので、いしいひさいちの漫画『経済外論』から「外論」という言葉を借りました。「外論」も十分挑発的ではありますが、通常の講義で扱う内容を「正伝」とみなして、この「外論」=「外伝」では線形代数の黎明期の歴史を紹介しようと考えたわけです。

実際の講義では、最初に、線形代数の基本的概念である行列式・ベクトル・行列・ベクトル空間が(実際にこの順序で)登場した年代を紹介し、行列式概念は17世紀に日本の関孝和によって世界に先駆けて導入されたこと(これは小松先生の主要な研究テーマの一つです)、行列概念と算法は19世紀半ばになって初めてシルベスターや

ケイリーによって導入されたこと(しかし、当初はイギリス以外ではほとんど注目されなかった)、ケイリーの論文には数を並べた「数ベクトル」も登場するが、ケイリーはそれをベクトルと呼んでいないこと(これから、当時はベクトルと言えば、ハミルトンの純四元数を意味していたことがうかがえる)、コーシーをはじめとするイギリス以外の欧州の数学者はケイリー以前から(そして以後も長い間)行列を使わずに1次変換や2次形式の形で線形代数を論じていたこと、などを紹介しました。

講義では板書を行わず、ipadにVGAアダプターをつないで、pdfファイルとして作成した資料をプロジェクタでお見せしました。pdfファイルの作成自体もipadで行いましたので、ipadがこのような形で使えることを示すデモンストレーションにもなったと思います。このような使用法が普及して、少しでも早くipadが普通の研究機器として認知されることを願っています。現在は、ipadを研究費で購入する際に、いちいち理由書を書かなければなりません。

ケイリーに関する話では、インターネット上に公開されているシルベスター全集とケイリー全集から該当する部分を取り出して(幸いにして英文なので難なく読めます)、画像としてお見せしました。講義資料の中で数式が並ぶのはこの部分だけで、あとは文章(自分で書いた)や数学者の画像(インターネット上から勝手に借りた)ばかりです。講義の後で、念のために出典や参考文献を記したページを追加しましたが、ネット公開がためられる代物なので公開していません。

講義には杉万俊夫先生をはじめとする学部・研究科関係者や、予告を見た元同僚の方々、さらに旧知の関連分野研究者が出席されました。出席者の方々には、この場を借りて、改めてお礼を申し上げます。

(たかさき かねひさ)

新任の先生方より

着任にあたって

倉石 一郎 (人間科学系)



私が長い長い大学院生活ののち、首都圏の大学によろやく職を得てこの吉田南キャンパスを離れたのは、2002年春のことだった。爾来11年半の歳月をへて、懐かしの学び舎に帰ってくる事ができた。先の見えない院生生活もつらかったが、家族をおいて単身赴任を続けた東京生活も決して楽ではなかった。勤務先の郵便受けに、ときどき京大、人環・総人から同窓会等の催し物の案内が届くことがあったが、ほとんどろくに中身を読まなかった。いちおう手紙をひらいてみると、すでに京大の教員になっている、自分の同期や後輩の知った名が目に飛び込んでくる。それだけでもう絶望的な気分になった。自分の境遇がひたすらみじめに思えた。とにかく京大、人環・総人という場所は、研究者としての自分を育んでくれた自分にとって大切な存在であるにもかかわらず、なぜか記憶にふたをしてしまいたいような、目をそむけたくなる対象であった。

吉田南キャンパス（という呼称にも若干の違和感があり、私には吉田キャンパスの方がしっくり来る）の姿もすっかりきれいに様変わりしてしまい、往時のアナーキーと言うか、すさんだと言うか、ある種の魔窟のような雰囲気をしのはむずかしい。ところで私にとってこの場所は、非常にアンビバレントなところである。この大学で過ごした最初

の二年間の記憶と結びついた吉田キャンパスは、どんな変わり者でも受け入れてくれる、太っ腹でふところの深いところだった。工学部出身で教育学をやりたいなどという変わり者が、一直線にそこに吸い寄せられていったのも、むべなるかなである。

ところが、大学院人間・環境学研究科の修士課程に入学した1993年以後、この吉田キャンパス観は一変することとなる。そこは、厚い学問の壁が高く立ちはだかり、容易に人を寄せつけない牙城となった。この「壁」をその全存在によって体現したのが、私の指導教官だった岡田敬司先生だった。だがそこは、ただ冷たい象牙の塔であっただけではなかった。私にとってまことに幸運だったのは、岡田先生が単に学問の師として高くその範を示されただけでなく、その全人格をかけて私にかかわって下さり、私の人間的未熟さ、甘えた考え、思慮のなさを指摘して下さったことである。私がいま先生のポストを継ぐにあたり最も不安に感じているのは、学問的力量もさることながら、この人格的感化力において遠く及ばないのではないかという危惧の念である。

いまこのキャンパス全体が猛烈な逆風を受けている。魔窟のようだったところに、言祝ぐべき「伝統」が存在するのかどうか私は知らない。だが少なくとも、私がこの吉田キャンパスでこの身に受けた教えはリアルである。このリアルさの名において、突風に抗する一枚の盾に私はなりたい。

(くらいし いちろう)

京都で古典を学ぶ幸せ

長谷川千尋 (国際文明学系)



2014年4月1日付で、総合人間学部国際文明学系(人間・環境学研究所、歴史文化社会論講座、東アジア文化論)に准教授として着任しました。

中学・高校時代から古典が好きで、京都の地と「自由な校風」に魅かれて

京都大学文学部・文学研究科に進み、国文学を専攻しました。とりわけ教養部時代は、凡庸で不出来な上に勤勉さにも欠ける学生でしたから、今こうして吉田南キャンパスの教壇にすました顔で立っていても、内心ではどこかしら面映ゆさ、バツの悪さを感じています。学部時代から茶道部に属して、京都のお寺で稽古や茶会をする機会に恵まれましたが、専門に進むにつれて、古写本を探訪する文庫調査、京都国立博物館を始めとする近隣の美術館・博物館の見学、古典芸能の鑑賞、季節の景物巡り等々にいそしんでいました。

その後、北海道大学に奉職し、8年ぶりに京都に戻ってまいりました。この春、桜の装いに、この時限りとはばかり華やいだ京都の町を見て、ほんの僅かな合間の車窓からの眺めでしたが、思わず目を奪われました。この京都で、古典文学を教えることができる幸せを、改めて実感しています。

中世の和歌・連歌を中心とする韻文を専門としていますが、作品を読むときにも実感を大切にしています。例えば各種の注釈書を見れば、作品の現代語訳がついているわけですが、多くの場合、これを読んでも、その歌がどのような情景を描き出しているのか定かには浮かびあがってきませんし、その中にどのような情調をこめているのかも伝わってきません。しかし、そこまでを理解しなければ、本当の意味で作品を解釈したことにはなりません。そして、出来れば実際に時鳥の声を聴き、飛ぶ蛩を眺め、時雨の雨を実感として知った

上で作品を味わいたいものです(この点は北海道の学生にはどうしても通じないものがありました)。が…。

韻文というと、ひょっとすると、何か得体の知れない曖昧で非合理的なもの、という印象があるかもしれませんが、それは恐らく誤解でしょう。韻文であれ散文であれ、意味は必ず言葉と文法に即して立ち現われてきます。そこからの極端な飛躍は許されません。しかも現代詩や短歌などと違って、古典和歌は、個人の名状し難い生の感情を読むことはまずありません。和歌の世界には、恋の物思い一つをとっても様々な型があります。和歌はそのような伝統的な規範に則って詠むものなので、過去の歌の詠みぶりを会得していれば誰しものが理解できるものなのです。現代人にとってはこの点が物足りないところかもしれませんが、実はこれこそが和歌の魅力であり命でさえあると言えます。京都で日本の伝統文化に接していると、様々な局面で和歌の心が息づいているのを感じることがあるでしょう。

国文学の研究課題としては、作品読解に限らず様々な観点がありえ、専門的な研究領域に分け入ってゆけば、そこにはまた相応の面白さがあります。しかし、基本に立ち返ってみれば、文学はただ肩の力を抜いて素朴に作品を楽しめばよいのです。その魅力は作品にこそ宿っているので、私に出来ることは黙ってそれを指し示すか、せいぜいその通訳を買って出ることぐらいなのですが、それと同時に、学生諸子の鋭敏な感受性と柔軟な発想によって、思いもよらない化学反応が起こることに期待しています。

(はせがわ ちひろ)

I	uman	S	編集後記 ◆『総合人間学部広報』第53号をお届けいたします。今号は、「総人・人環学生プロジェクト2013『みる』」の特集号です。斬新な発想をもってプロジェクト研究にチャレンジしてくれた学生の皆さんおよび支えて下さった先生方に敬意を表します。こうした試みを別角度から見ると、常に新たな取り組みを模索しなければならないという、現在の大学を取り囲む状況が透けて見えます。同時に、学生プロジェクトは、競争的研究資金獲得に追われる私たちの研究環境を反映しているようにも見えます。ご退職なされた先生や新たに着任された先生方のお言葉も併せて、総人・人環が今後どのようにあるべきか、考える契機になればと思います。
ntegrated	H	tudies	

(K・K)

人間・環境学研究科
総合人間学部 広報委員会